

〔分かち合う世界へ〕 50、若者の探求心支えたい

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2022/01/09 16:48

2021年が悪夢のようにあっという間に過ぎた。年の瀬の忙しさであたふたしていたらいつの間にか大晦日（みそか）になり、一年が終わる心の準備もできないまま、チャオプラヤ川の空に勢いよく打ち上げられた花火を見て年が変わり新年になったのか、と、諦めと安堵（あんど）の入り交じった気持ちになった。

12月18日と27日に、知人に頼まれてズームによるオンラインでの日本の高校生たちへの講演（将来、国際分野や開発援助等への進路を考える高校生たちへ経験談やアドバイス）を行った。これは上智大学のグローバル教育センターが主導する、教育でつなぐ“高校・大学の連携”を目指したオンラインによる“せかい探求部”に所属する60人の、それぞれ違う高校に通う生徒たちを対象にしたものだ。

将来、国際舞台で活躍する日本の若者を育てるには、大学に入ってから教育では遅すぎる。中学生や高校生たちに持続可能な開発目標（SDGs）などのグローバル課題や開発途上国の問題、開発援助に対する知識などを深める場を提供し、大学の学部の選択や将来の進路を自発的に見つける手助けとなるような教育が必要だ、という私の持論とも一致する。それ故、快く引き受けた。

高校生の1人は、タイに旅行した知り合いから、タイ北部のチェンライ県の王様のプロジェクトで生産されたアラビカコーヒーをお土産にもらったのが縁で、タイにおけるアラビカコーヒーの歴史やコーヒーの生産者である少数山岳民族のことをもっとよく知りたいと思ったという。

これは一つの例だが、若者が未知なことへの強い興味や探求心を抱き、それを将来の自分の学業や研究に結び付けてゆくきっかけとなる種は、こうしたどこにでもありそうな日常茶飯事にも存在しているのだと思う。それを単なる一時的な好奇心や興味で終わらせてしまうか、それとも、それをきっかけにして、背景や詳細を掘り下げ、調べて知ることへの面白さを導き出し、さらなる探求心を持ち続けるように後方から応援するのは、教育者

としての大きな使命の一つだと思う。

こうして国際理解とグローバルな視野を身に付けた多くの優秀な若者たちが育ってゆけば、日本の、そして世界の持続可能な将来は明るいだらう。

昨年未まで減少の一途をたどっていた新型コロナウイルス新規感染者数は、変異株「オミクロン株」の市中感染者の増加とともに、ここに来て増加傾向に転じた。

オミクロン株は感染力は強いが、重症化することが少ないからそれほど大きな脅威ではない、という見方をする人がいるが、私はそうは思わない。オミクロン株はそれ以前の変異株とは大きく異なり30カ所にも及ぶ多くの部位で突然変異が起きている。それ故、オミクロン株内部で性質が変化し、強い感染力と重症化・高致死率の双方の性質を持ち合わせたウイルスに変化する危険性があることを忘れてはならないだらう。

かつて、日本で約2年半の間に約39万人が死亡したといわれるスペイン風邪は、2年目にその致死率が1年目の4倍以上に跳ね上がったとの統計がある。油断は大敵だ。年頭にあたり、読者の皆さまのご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士（農学）。元国連食糧農業機関（FAO）事務局長補兼アジア太平洋局長。元明治大学特任教授。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。